

2020. 8. 16. 聖霊降臨節第12主日礼拝式説教

ルカ福音書講解説教

聖書：ルカによる福音書12章22-34節

『思い悩むな』

今朝の聖書箇所はとても有名な箇所です。教会に来ていない人でも、この箇所は知っているという人は少なくありません。どうしてか、と考えると、ここに人生の指針のようなものを読み取ることができる、と思うからなのかもしれません。「思い悩むな」ということが、人生訓や、指針のように受け取られているのは、よくわかるような気がします。

思い悩むな、それは例えば、人生の先輩のところに尋ねて行って、悩み事を相談したら、いろいろ助言を受けた最後に、先輩からひとこと「思い悩むな」と言われるような言葉です。そして先輩からそう言われて、悩んでいた自分がばかばかしくなった、というような経験につながる言葉として、受け取られているのかもしれない。

しかし、思い悩むな、と言われてすぐに思い悩むことを仮にやめたとしてもやがてまた別の悩み事が出てくるのではないのでしょうか。「思い悩む」を「思い煩い」と訳しているものもありますが、思い煩いという裾野が広く、わたしたちの人生に影のように寄り添っているものです。人はどんな小さなことでも、思い煩うことができる。どんな些細なことでも、気にやみ、あれこれ思い煩うのです。小さな子どもから、齢を重ねた人たちに至るまで、生きることと思ひ悩むことは、いつも同伴している。極端に言えば、生きることは思い煩うことだ、と感じている人がいるかもしれない。

今日の聖書箇所を読むと、ここに信仰抜き的人生訓が語られているのではないことは、すぐにわかることです。そもそも聖書には単なる精神論としての人生訓など書かれていない。それは、人間の努力次第で、気持ち次第で、思い悩むことから自由になれる、というような楽観的なことが書かれているのではない、ということです。

ここで主イエスはこう語られます。いのちのことで何を食べようか、体のことで何を着ようかと思ひ悩むな。鳥を見よ、播かず、刈らず、納屋も倉もなしだが、神はこれを養い給う。あなたがたは、鳥よりもどれほど価値があることか。思い悩んだからと言って、寿命を延ばすことができるのか。そんな小さな

ことすらできないのに、なぜ思い悩むのか。

そう語られて、同じことを違うたとえで繰り返される。野原の花がどのように育つかを考えよ。紡がず、織らざるなり。しかし栄華を極めたソロモンでさえ、この花の一つほどにも着飾ってはいなかった。今日は野にあって、明日は炉に投げ込まれる草でさえ、神はこのように装ってくださる。ましてあなたがたにはなおさらのことである。

そして重ねて言われる。何を食べようか、何を飲もうかと考えてはならないまた、思い悩むな。

しかし話はこれで終わりではなく、この後 30 節から 34 節までの言葉が続くのです。しかも、不思議にもこの結論部分は、先週読んだ 13 節から 21 節の結論部分とほぼ同じ内容なのです。これはとても興味深いことです。つまり先週の聖書箇所と今週の箇所とは、語られている内容が違うように見えても、二つは繋がっているということです。

今日の聖書箇所には、確かに「思い悩むな」という言葉が繰り返し出てきます。しかし、それだけでなく、神を主語とする文章が繰り返されています。

「神は鳥を養ってくださる」「神は装ってくださる」「あなたがたの父は、これらのものがあなたがたに必要なことをご存知である」。神が養い、神が装い、神が必要なものをご存知だ、と繰り返されます。しかし、ここを読んで思うのは、神は鳥を少なくとも直接的には野鳥を世話するようには養ってはいないし野の花を園芸家のように、直接手入れしているわけではない、ということです。そうするとここで養いとかが装いとかがいうのは、もっと広い、最も根本的なことを主は語っておられるのではないか。鳥も野の花も、神の創造されたこの自然の中に生かされ、自然の恵みの中で養われ、装われ、必要なものが与えられている、主はそのことを語っておられる。それは、神こそがわたしたちを真実面倒見てくださっている、ということなのです。「まして、あなたがたにはなおさらのことである」。

鳥や野の花も、神の恵みのうちにある。まして、あなたがたにはなおさら、という言葉には、主イエスの胸のうちにある深い思いが込められているのです。

神が人間の面倒を最後の最後までみるために、どれほどの愛と、犠牲と痛みを負っているか。その愛は、どんな豊かな愛か。キリストご自身、この世界に來られたのは、まさに、神が人間の面倒を最後の最後までみるためなのですから、この一言に込められたものは、深いのです。十字架も、復活も、神が人間

のために与えた恵みそのものです。

そしてそれに続けて「信仰の薄い者たちよ」と主は言われた。それはどういう意味かと言えば、神が養い、装ってくださる、ましてあなたがたにはなおさらだ、ということはすべて信仰の事柄だ、ということです。

主イエスがここで語っておられるのは、わたしたちを、養い、装い、必要なことをご存知である神に対する信頼、感謝、喜びです。さらに言えば、感動です。父なる神は、わたしたちの思いを越えて、必要なものをすべてご存知なのだ、ということに対する感動です。神のわたしたちに対する愛の豊かさ。それはキリストの十字架と復活によって明らかにされるのですが、神は人間を最後の最後まで、面倒をみる、愛しぬく、新しいいのちを与えようとされる。そのことをキリストご自身が感謝し、喜び、信じておられる。その喜びから語られた言葉です。

だから、「ただ、神の国を求めなさい」と主は言われるのです。神の恵みの支配を受けとめ知りなさい、その恵みを求めなさい、と言われるのです。人間にとって、まず、必要なことは、神の恵みの支配を受けとめ、知り、尋ね求めることだ、と言われるのです。

「小さな群れよ、恐れるな。あなたがたの父は喜んで神の国をくださる」小さな群れとは、弟子たちの集団のことでしょう。あなたがたの父は喜んで神の支配、神の恵み、を与えてくださる。究極の救いを与えてくださる。死んでもなお、神の御手のうちにある究極の救いです。だから安心して恐れるな、というのです。もう恐れなくていい、という安心、それは神の与えてくださる恵みを受けることから始まります。

わたしたちが神から与えられる恵みを受け、救いを受けていくとき、安心が与えられる。その時、わたしたちの生き方は変えられていく。それは、人生の思い悩みの質が変えられていくのです。確かにわたしたちの人生から思い悩みは無くなることはない。相変わらず悩み続けるかもしれない。しかし、わたしたちの根本はすでに神の恵みの中にあり、キリストの十字架に背負われているということを知らされての思い悩みは、もう決定的なものとはならない。それが解決しなければ、どうにもならない、というものではない。根本は救われている。だから、形容矛盾を承知で言えば、安心して思い悩む、という世界が開けてくるのです。

先週の聖書箇所では食欲の話が出てきました。人間が自分で獲得し、自分で所持する、そういう心と体の向きが、神が与えてくださるものを受ける、という向きに変えられていく、それが必要だ、ということを知りました。そして今日のところでは、何食べようか、何を着ようかと思ひ悩むな、何故なら神がわたしたちに本当に必要なものをご存知であり、神が救いと恵みを与えてくださるからだ、ということでした。

両者に共通するのは、自分が自分の力で持つ、何を食べようか何を着ようかと思ひ悩む、自分の世界から、神が与えてくださるものを受ける、ということに気づかされていくことがなければならない、ということです。

自分のために富を積む、自分が自分の所有するもので豊かになる、ということではなく、天に宝を積む、という方向転換です。天に宝を積むと言ってもそれはただ与えられるものを感謝して受ける、それ自体が天に富を積むことなのです。

自分の力で何かを獲得し、自分の中で思ひ悩む、という循環の中にあるわたしが、与えられている恵みにまことに気づかされ、その恵みを受ける。感謝して受ける。活かされていく。そこから、わたしたちの日常の生活を歩んでいくキリストはその世界にわたしたちを招いてくださっているのです。